

公募型研究事業 (ブリ類の α 溶血性レンサ球菌症の疫学調査)

今岡慶明, 福留慶, 森島義明

【目的】

近年、ブリ類の α 溶血性レンサ球菌症に関して、その発生傾向（ワクチン投与効果、医薬品治療効果等）が変化してきている可能性がある。特に、従来の抗血清に凝集を示さない抗原変異株（*Lactococcus garvieae* II型）が増加し、ワクチン投与効果、医薬品治療効果等が従来のもとは異なることから、養殖業者はその対策に苦慮しているところである。そこで、その原因究明、対策確立等を目的に、県下ブリ類養殖業者を対象としたアンケート調査及び本症罹患魚からの原因菌分離、保存を行った。

【方法】

1 アンケート調査

本県内のブリ類養殖業者3業者に対し、2019年5月～10月にかけて、生簀毎の養殖尾数、水温、給餌量、ワクチン接種状況、投薬状況、本症の発生状況等に関するアンケート調査を実施した。

アンケートにより得られた情報は、共同研究者である公益社団法人日本水産資源保護協会へ提供し、とりまとめを依頼した。

2 養殖場における罹患魚からの原因菌分離

アンケート調査を実施した3業者に対し、本症による斃死が確認された場合、斃死魚から原因菌分離・保存を行った。

分離・保存した菌株は、全て共同研究者である国立研究開発法人水産研究・教育機構 増養殖研究所へ送付し、遺伝子解析等を依頼した。

【結果および考察】

1 アンケート調査

アンケートの結果、*L. garvieae* II型を対象としたワクチンを接種しているにも関わらず本症の発生が確認される事例、発生後にエリスロマイシン等による投薬により一時終息しても再発する事例等が確認された。また、業者、漁場によっても発生状況は異なっていた。

2 養殖場における罹患魚からの原因菌分離

ブリ由来12菌株、カンパチ由来2菌株の計14菌株を分離・保存し、当センターにおいて抗血清により確認したところ、全て*L. garvieae* II型であった。また、近年はリンコマイシン耐性菌が多く確認されているが、本調査において分離した菌株は全てリンコマイシン感受性菌であった。

【謝辞】

本研究を実施するに当たり、公益社団法人日本水産資源保護協会の岩下誠事業部長、矢野雅主査及び国立研究開発法人水産研究・教育機構 増養殖研究所の嶋原佳子研究員に多大なるご指導とご協力を頂いた。各者に対し、記して深謝する。